富士登山口周辺の浅間神社における境内構成と富士山との位置関係に関する研究

—吉田口の北口本宮冨士浅間神社を中心として—

建設工学専攻（修士課程） 503132 千葉千章（ちばちぐさ）

建築史研究 指導教員 伊藤洋子教授

1 研究の概要

1－1 研究背景と目的

古くから人々の信仰を集めてきた富士山だが、たびたび起こる噴火から山麓の各地には、浅間神社が祀られるようになった。本来富士山には吉田口・河口湖口・須走口・須山口・御殿場口・大宮口・村山口の7つの登山口があり、吉田口は最も繁栄した登山口で、江戸中期ここからの登山者数は、河口・須走・須山の3口を合わせた数と伯仲するほどだったと「隔掻録」にある。

この吉田口にある北口本宮冨士浅間神社は、富士山信仰に基づく伝承は古くからあるが、社殿の創立と沿革については中世頃までの史料が少なく明確ではない。近世に至って現在みるような境内と各建物が整備された。

本研究では、史料により可能な限り、現在の姿になる前の、境内空間の歴史的変遷について考察を行ないたい。それとともに富士山の登山口周辺の浅間神社を調査し、富士山との位置関係を検証、それらの特徴を明らかにすることを目的とする。

1－2 研究方法

北口本宮冨士浅間神社は平成15年7月に行った実測調査から、境内の各建物についてデータとし、史資料を収集、かつ構造・意匠形式を把握する。

その他の浅間神社は平成16年11月に行った調査より、境内構成をデータとし、史資料を収集、富士山との位置関係を検証し、比較考察をする。

2 北口本宮冨士浅間神社の概要

2－1 歴史概要

図1 八葉九尊図 1680年

神社の起源は日本武尊が富士山を遥拝した地である「大塚之丘」で、もとは「諏訪の森」と呼ばれる諏訪明神境内に鳥居を建て、富士山遥拝所としたと伝えられている。

延暦7(788)年甲斐守紀豊庭朝臣により、現位置に浅間明神を移し造営された。その後当時の領主らによって造営、修復、諸寄進、境内の整備等がなされ、宝永元(1704)年、幕府代官支配の時代になると、社殿の改修は富士講の財力に頼るようになる。

現在の境内は享保20(1735)年から寛保元(1741)年に、東京小伝馬町の富士講の有力者であった村上光清が行った大改修によって完成した。

2－2 神社の沿革

境内の最も古い状況は、延宝8(1680)年に描かれた「八葉九尊図」から窺うことができる(図1)。この図からこの頃すでに浅間神社境内が整備され、橋・仁王門・随神門(あらはばき)・拝殿・本殿(本堂)が存在していたこと、諏訪神社と浅間神社が別々に存在していたことが分かる。その後村上光清が享保20(1735)年神社再建のため同志を募り、修復工事を進め元文4(1739)年主要部分の改修を終えた。

光清は、幣殿・拝殿・神楽殿・随神門・護摩堂・鐘楼・仁王門・手水舎・額殿・社務所・富士登山門・末社22社・金灯籠8対・石灯籠83対を完成させた。光清の手により拡大した境内だが、江戸時代後期から明治にかけての絵図や史料を調べると、明治以降、明治元(1868)年に出された神仏分離令によっていくつかの建物が失われたことがわかる(表1)。

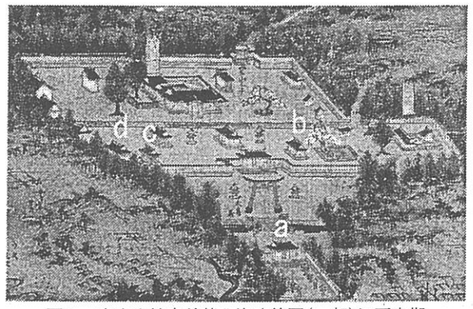

図2 富士山神宮并麓八海略絵図(一部)江戸末期

表1 神仏分離令によって消失した建物(図2参照)

a	仁王門	「八葉九尊図」に仁王堂として描画され、「富士山神宮并麓八海略絵図」にも描かれる。
b	護摩堂	「富士山神宮并麓八海略絵図」「富士山北面真形絵」に描画される。
c	鐘楼	「八葉九尊図」「富士山神宮并麓八海略絵図」「富士山北面真形絵図」に描画される。
d	額殿	明治 36(1903)年の「富士山北口本宮富士嶽神社真景」を最後に消失。

こうした神仏分離の締めつけは、やがて廃仏毀釈にエスカレートし、各地で寺院が襲われた。北口本宮冨士浅間神社では、村上光清が寄進した建物の中で、護摩堂・鐘楼・仁王門などが破却された。

以上のように元々産土神である諏訪神社境内にあった浅間神社が、富士講興隆による吉田口からの入山の増加や、村上光清の改修もあり、明治5(1872)年に諏訪神社が浅間神社の摂社となり、境内の拡大につながる。以前は諏訪神社中心だったのが、浅間神社中心の境内・軸構成へと変化したのである。そして神仏分離令なども大きく影響し、現在の姿に至る。

3 富士山登山口の主要浅間神社について

吉田口の北口本宮冨士浅間神社を調査し、最も興味を持ったのは、広大な境内でありながら参拝の軸が富士山の方角に向いており、直接富士山を遥拝するような境内構成がとられているところである。

そこで他の浅間神社はどのようになっているか、富士山にある登山口周辺の浅間神社を選定し[註1)]、富士山と神社の位置関係を明らかにすべく実測調査を行った。調査神社の富士山の軸と参拝の軸を比較すると、

A富士山の軸と参拝の軸の関係性がないと思われる神社
B参拝の軸が富士山の軸から多少ぶれる神社
C富士山と参拝の軸が真逆の神社
D富士山と参拝の軸が同じ神社

の4つに分類することができた(表2、図4)。

図3登山口別主要浅間神社分布

3－1 分類A

北口本宮と同じ吉田口の小室浅間神社は、現在は富士の神体である木花開耶姫命を祭神としているが、元は下吉田の産土神であったと伝えられている。本来は富士の祭神を祀っていなかったということが、富士山への軸を重んじていない境内構成である理由ではないかと考える。

河口浅間神社はすぐ後ろが山であり、湖が造りだした微地形により現在の構成になったとも言える。元の社殿は富士山を拝む方向に建立され、現在の社殿より山の手に鎮座されたといわれている。

また富士山本宮浅間大社は、山宮浅間神社とは里宮と山宮の関係である[註2)]。これは純粋に富士山を遥拝するための山宮と、その後盛んになる富士山登拝を、大宮口から促し、また祭事等により庶民へも浸透させるための里宮、という関係であったと考えられないだろうか。そのために里宮の富士山本宮は富士山の方角に関係なく、当時の主軸道に面していた現在の位置に造営されたのではないかと推察する。

3－2 分類B

須走口と御殿場口の神社に見られる関係で、どちらの登山口も富士山の東に位置する(図3)。これらはだいたい富士山の方角を向いているが、富士山の軸に正確に重なるわけではない。そのためそれほど「直接富士山体を遥拝する」ことを強く感じさせる神社ではない。

3－3 分類C

この神社は参拝の軸とは真逆に富士山がある。これは河口湖口の神社のみに見られる軸関係であった。

表2 登山口別浅間神社の分類

登山口	名称	所在地	分類
吉田口	北口本宮冨士浅間神社	山梨県富士吉田市	D
	小室浅間神社	山梨県富士吉田市	A
河口湖口	冨士御室浅間神社	山梨県南都留郡	C
	河口浅間神社	山梨県南都留郡	A
須走口	須走浅間神社	静岡県駿東郡	B
御殿場口	一幣司浅間神社	静岡県御殿場市	B
	新橋浅間神社	静岡県御殿場市	B
大宮口	富士山本宮浅間神社	静岡県富士宮市	A
	山宮浅間神社	静岡県富士宮市	D

この理由を考察する上で考えなければならないのは敷地条件であろう。この冨士御室浅間神社の敷地は、地理的に湖を隔てて富士山を美しく望める場所にある。このことが神社を造営する際に、参拝の軸は逆ではあるが、拝殿から湖を隔てて富士の全容を仰ぎみることができる境内構成になったのではないかと推測する。

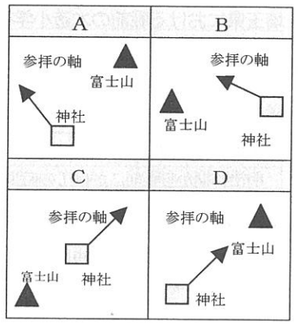

図4 富士山と参拝軸の関係

3－4 分類D

吉田口の北口本宮と富士山表口と呼ばれる大宮口の山宮浅間神社は、参拝の方向に富士山があり直接富士山を参拝するような境内構成になっている。特に山宮浅間は、建物がなく御神木といくつかの礎石だけで、空間そのものが神殿であるといえる構成である。この2つは他社に比べ「山体を拝する」という形がより強く感じる神社である。

4 北口本宮富士浅間神社と富士山本宮浅間大社

4－1 歴史背景

分類Dの北口本宮と山宮浅間神社は、それぞれ吉田口と大宮口の神社である。吉田口は北口本宮の境内が登山口に直結していたことや、富士講の興隆により富士登山者が多く、最も発達した登山口であり、大宮口は山宮と里宮の神社関係をとり、ただ単に富士山の神霊を祀るだけでなく、村里に里宮を置くことで祭りなどによる庶民の生活への関与を根強いものにした登山口であるといえるのではないだろうか。

4－2 祭り

8月下旬に行われる吉田口の「火祭り」は、日本三奇祭の一つと言われ、篝火や松明を焚き、浅間神社からは赤富士を模した神輿が担がれる。本来この祭りは諏訪神社の例大祭であったが、現在は両社から神輿が出され、富士山の鎮火を願い行われている。富士山本宮は4月と12月という時期に神幸を行い、山を田の神ととらえ、神迎えと神送りという行事がこの本来の姿ではないかと、柳田國男氏が「山宮考」のなかで指摘するように農耕色を強く感じる。

富士信仰に関わる「富士曼荼羅」[註3)]もそのほとんどが吉田口・大宮口の両口を中心に描かれており、それぞれ独自の沿革により他の登山口よりも発展を遂げ、今日に至るまで人々に親しまれ富士山に対する信仰を伝え続けてきたといえよう。

5 まとめ

人々の富士山に対する畏敬の念や親しみは、歴史を経てもなお変わらず持ち続けられている。しかし地理的要因や富士信仰の影響などにより、登山口によって神社の境内構成は様々であるといえる。

註1)7登山口のうち須山口は一度廃道となった経緯があるため、また村山口は村山浅間の仏教色が強いためはずし、5登山口とした。

註2)山宮とは山上や中腹にある社であり、里宮に対して言う。山の神を祀ったものとし、神は天上から降臨するものと考え、里宮は山麓や村里に祭り場を設ける要求から、お旅所として起こったものが多い。

註3)富士信仰を源流として描かれた「参詣曼荼羅」。

参考文献「富士信仰と富士講」平野榮次著作集Ⅰ/岩田書院
「山梨県史文化財編」「山梨県史資料編6」山梨県
「浅間神社の歴史」官幣大社浅間神社社務所/名著出版
「北口本宮富士浅間神社における境内空間の歴史的変遷」
石井都/東京理科大学卒業論文 2004年度